



消える

朝方に町を濡らした雨は既にやみ、私達は表に出た瞬間、その強い光に思わず眩暈をおぼえた。太陽が乱暴に町を照らしながら人通りの多い町並みに彩りを加えていた。暑いなあ、と大沢さんが胸元を扇ぐ。誰かの汗の匂いが、私に届いている。目の前を歩いている薄っすらと茶色い髪をした女性の脇に汗が滲んでいるらしく、青いシャツの脇が濃く変色していた。

濃い青色。深く沈む夜の色に。

「おれ、肉が食いたいなあ」と、大沢さんは言う。

だから今日は焼肉屋で昼飯を食うことにする。寺田は仕事が詰まっていてまだ出られない。いつも行く焼肉屋は会社から歩いて五分くらいのところであって、昼食時には随分と安く食べられた

。

いらっしゃい、とも言わずに店員はテーブルに水を置く。よく冷えているようで、透明のグラスには露が幾つも張りついている。店のオレンジ色の照明がそれに反射すると、水は青色であるように見える。なんとなしに目を遣ると、水を運んできた女性は忌々しげに背を曲げていた。まだ背を曲げるような歳には見えない。額に刻まれた皺から見ても四十代そこそこではないだろうか、と私は考える。何度か入った店だったが、初めて見る店員だった。おれカルビ定食、と大沢さんは言う。あ、あと、ビールも。瓶で。グラス二つね。私はとりカルビ定食を頼む。

客は私たちと、あと一人しかいない。店の隅に座るその男はスポーツ新聞を広げながら冷麺をつついている。青く色あせたシャツを着崩した、三十前後の男だった。

「そういえば」と、大沢さん。

「まだ仕事の途中だったな」

「そうですよ。大沢さんすぐ赤くなるし」

「まあ、別にいいか」

「いいんですか？」

「いいんだよ。別に」

店員がビールを持ってくる。薄暗い店の中で、その瓶は青い光を纏っているように見える。夜に光る虫のようだ、と私は思う。巨大な、深く沈む夜に光る虫。私は瓶から透き通った黄金色の光が自分の頬を撫でているのを感じる。

蓋は既にあけられている。

あいた口からはなにか白い煙のようなものが立ち上がっている。よく冷えてるな、と大沢さんは呟き、瓶を傾ける。私は右手にグラスの冷たさを感じる。もう少し力を加えたらそれは壊れてしまうのだ、と思う。

注ぎこまれる。

大沢さんが傾けすぎた所為で、グラスから白い泡がこぼれ落ちる。グラスの壁面を伝って、泡は私の指にまで届く。舐める。泡は苦味を残して、舌の上で消える。

わるいわるい、と大沢さんは言いながら自分のグラスにも注ぎ、一口に飲み干した。私も同じ動きをなぞる。乾いた口の中で酒が弾け、食道の壁面に冷たく染み込んでゆくのを感じる。

「やっぱりうまいなあ」と、大沢さんは笑った。

「やっぱり仕事の合間に飲む酒はうまいよ」

私はやがて胃の底に熱を感じた。店内の冷房の中にあっても、飲み込んだ冷たい液体の中にあっても、それはしっかりと熱かった。その熱はやがて胃の奥からゆっくりと上昇し、頬を包む。熱を持った頬の肉が赤く染まる様を思い浮かべながら、私はもう一度グラスに口をつけた。底に少しだけ残っていたものが咽喉を撫でて、消えた。

永遠機械

永遠機械さえあれば息子の命は助かる、と何処からとなく沸いた噂が言った。助かる、というのはおかしいかもしれない。もうとっくに息子は死んでいた。千切れた処を繋げるだけ繋いで冷凍保存された息子の身体はまるで出来の悪い人形のように、息子の母親は正の感情も負の感情も混ぜっこぜになって虚ろ気に塗りつぶされた瞳でカプセルの中を見つめ続けていた。

からから、と永遠機械は廻る。

廻ったのは永遠機械で、息子じゃない。それでも息子の隙間から覗く螺旋や歯車の回転はそのまま生命の鼓動であるかのように、息子の母親の口元を少し綻ばしたのだ。

前菜のキムチが歯に引っかかっていた。下の右の歯。奥のほうに。部位は特定できない。下でなぞると、つるりと硬い歯の間にやわらかいものを感じる。それは、俺の舌の力だけではほじくり出せない。

諦めて冷麺に手をつける。

この店ではいつも冷麺を頼んでいる。昔は昼休みによく来ていた。仕事を辞めてからはあまり来ていない。今日は、競艇で少し勝ったので、それで来た。さっき昔の上司とすれ違った。向こうはこっちに気づいていないようだった。部下らしき若い男と楽しそうに歩いていた。彼の笑顔は昔からどこか、気に食わなかった。

白い麺がその艶やかな表面に黄色い照明を乗せる。割り箸で持ち上げ、俺はすする。つゆが唇に付着している。少し粘質のつゆ。舌で舐め取り、すすった麺を啞内の右奥に入れる。左には虫歯がある。歯医者には行っていない。噛むとしみる。だから俺は、右の奥歯で麺を噛み締める。

舌でその端を撫でながら。

いつも通りのつゆの味が滲む。口の中はその味を求めている、だから俺は更に麺をすする。あごの筋肉でその食感を味わう。舌が、辛い、と言う。それほど辛くはないのだ、と俺は思う。

噛みながら、読みかけの新聞に目を落とす。読み終えた記事をめくると写真の中でどこかの野球選手が宙に浮いている。俺の知らないところで誰が宙に浮こうが知ったことじゃない。だがこの選手の浮き方はどこか滑稽で愛らしい。初めて空を飛ぶ犬のように愛らしい。だから俺は笑う。

ひっそりと笑う。

店の中にいる、誰にも届かないように笑う。先ほど頼んだ水をまだ持ってこない店員にも届かないように笑う。少しだけ震わせた咽喉に噛み千切った麺が通る。麺が閉じた咽喉を押し広げている。咽喉がつるりとしたその表面を感じている。その感覚は俺に少し冷え込んだ日曜日の朝を思い起こさせる。少し冷え込んだ日曜の朝には、いつもはだけた布団を手繰り寄せる。擦り切れて所々破れた布団からは白い怪我覗いているのだ。細かくて白い毛が。俺の汗を吸い込んでいる毛が。手繰り寄せた指先に絡む。

指先は乾いている。

少し痛む。

割り箸から裂けたとげが人差し指の側面に食い込んでいる。突き刺さっているのだ、と俺は思う。痛みは殆どないが、どことなしにむず痒い。箸を置き、左の親指と人差し指で抜こうとするも、抜けない。俺の爪先はとげを摘めずに、ただ指の肉を摘む。皮膚が赤くなり、痛む。不意に、皮膚に突き刺さるそのとげがなにか小さな植物のように見える。小さな植物が俺の指に芽吹いている。やがて芽は俺を吸い、育つだろう。腕には根が這うだろう。無数に這う根で俺の腕は一杯になる。膨れ上がり、そしてそこから咲くのだ。

白い花が。

つるりとした白い花が。

俺はとげを抜くのを諦め、再び冷麺に手をつける。

銀色の器には、まだ手をつけられていない具の間から麺が光っている。俺はそれを箸で摘みながら、咽喉の渴きをおぼえる。先ほど頼んだ水がまだ来ていないのだ、と思う。だからもう一度声を上げ、頼む。大きく咽喉を震わせると乾いた咽喉が更に枯れた。

糞犬

糞犬は前足の脰脰を薄くスライスして炙って食うのが一番旨いらしいのだが、俺はまだ食べたことがない。お前はまるで糞犬だな、とバイト先の先輩に言われたのを思い出して、お腹がぐるるとした。

ぎららと太陽が焦げつき、その暑さには全く以ってそぐわない涼しげな青い空が俺を見下している。

どいつもこいつも死んでしまえばいい、という俺の唯一つの祈りもこのクソ暑さの前に蒸発してしまったので、ちょっと困った。

鳴る

銀色をした容器に水を注いでいる。溢れるほど注いでから氷を入れ忘れていたことに気づく。だからあたしは銀色の中身を流しの中にぶちまける。水は流しの中で弾け、あたしに向けて水滴が飛ぶ。水滴は手の甲と、額と、眼球に届く。眼球に届いた水は閉じられた瞼に押し出され、頬を伝っている。

温い夏の水道水はあたしの頬を伝っている。

息を吐く。

背中が痛い。昨日の朝から急に痛み出した。なにか硬い針金のようなものが背の筋に絡みついているのだと思う。背中を曲げていると少し痛みが和らいだので、今朝からそうしている。息子はあたしの姿を見て笑う。声を上げて笑う。息子の甲高い笑い声はあたしの鼓膜を傷つけながら横隔膜を搔く気がする。何度も搔きむしる気がする。だからあたしは大きな声を出す。息子の笑い声が穏やかに背に染みているのを感じながら。大きな声を出すので、飼っている子犬が吠える。犬の名は知らない。息子が名前をつけ、あたしには秘密にしている。息子の名前は息子の父親がつけた。息子の名前は秘密ではない。息子の名前は海を渡る鳥に似ている。夕時が似合う鳥に似ている。

客が呼ぶ声が聞こえる。

店の中は橙色をした電球に照らされ、空気がねとりと澱んでいる。

あたしは額に汗を掻いている。

エプロンの端で拭い、向かう。冷麺の客だ。先ほどから読み耽っているスポーツ紙を丸め、水を催促する。男のグラスの下には水が溜まっている。グラスを持ち上げようとする、水が吸いつく。それでも持ち上げると小さく水が飛び散る。冷麺の器にはまだ麺が残っている。それがなんとなく、右手の甲を這う感じがする。あたしの手で巻きついた麺は次第に強く締め、指先から血の気を奪ってゆく。そして感覚のなくなった指はそのまま手から零れ落ちてゆくのだ。

ぽろぽろと、零れ落ちる。

指はあかぎれている。赤く、幾つも亀裂が走っている。洗剤が合わないのだろうかと思い、変えたが、治らない。店主は病院に行け、と心配するが、それは別にいい。それよりも背の痛みがいやだ。いやだ。このまま段々と大きくなってゆく気がする。大きくなってあたしの背中を押し潰してしまう気がする。押し潰されたあたしはぐしゃりと折れ曲がってしまう気がする。

今度は容器に砕いた氷を入れ、水を注ぐ。

氷がひび割れる音がする。

手近にあった長箸で搔き回す。出来損ないの鈴のような音が鳴る。

あたしはしつこく回し続ける。しつこくしつこく回し続ける。あたしは搔き回すだけの機械になったのだと思う。身体感覚が、意識の奥に潜る。奥の厨房で店主が舌打ちをしている。銀色の容器の側面には露が溜まりだしている。露は次第に大きくなり、連なり、大きくなる。露は橙色の光を中に閉じ込めている。閉じ込められた光は露の中でぐるぐる回っているように見える。

ぐるぐると。

露が垂れた。それは銀色の壁面を滑り落ちながら、歪んだ一本の線を描く。

あたしは額に汗をかいている。

店には新しい客が訪れている。ドアについた錆びたベルがその訪れを知らせている。錆びたベルが鳴る音は背の痛みと響きあう。背中の内側が不愉快に震動している。あたしはエプロンの端で汗を拭い、向かう。歩くとねとりとした店の空気が耳の端を撫でる。帰ったら今日こそ風呂場のタイルを洗わなくてははいけない。ぬるぬるする、と言って息子が気持ち悪がるから。

自慢のあごひげを左手で撫でながら、それじゃあ、と中村先生は話を始めた。田岡は相変わらず眠そうな目で先生の足元をぼうっと眺めていた。そうして今日も、中村先生のケツ学ゼミが始まる。宇津井は一人で目を爛々と輝かせている。

そもそもが間違いなのだ。僕はお尻について勉強するために大学に入ったのではない。哲学だ。哲学を勉強したいのだ。誰が大学に「ケツ学」のゼミがあるなんて考えるだろうか。誤植だと思いに決まっている。と、というか、面接のときにだって中村先生は哲学の話をしなかったっけか？キルケゴールについて話さなかったっけか？ちくしょう、騙しやがって。入った当初はよく、そう思ったものである。

今日の議論のテーマは『現代社会における「お尻好き」と「おっぱい好き」との間にある、精神的成熟度の格差について』だった。宇津井が嬉々として語り始める。こうなった宇津井を止めるのは至難の業だ。彼はこのゼミで唯一「ケツ学」がお尻についての学問だという事を見抜いて入ってきた男で、つまり、とんでもなくお尻の好きな男であった。僕もお尻は好きだが、この男のそれはまるでケタが違う。

「女とはつまり、ケツである」

「俺はケツクイだ」

「世界はケツで廻っている」

などの数々の名言を持ち、顔もスタイルもパツとしないが（あえて形容はしない）お尻だけは妙にいい形をした女の子（ぷりっぷりだ）と付き合う宇津井は間違いなくこのケツ学ゼミのトップ学生だ。ただ、中村先生とは「ケツ」という呼び方を巡って度々意見が食い違い、一度殴り合いの喧嘩になったこともある。「ケツ」という呼び方は下品で「おしり」に対する冒瀆である、というのが中村先生の見解であった。どうやら「ケツ学」というのは学校側がつけた名前らしい。まったく馬鹿げている。だが、ここのゼミとはつまり、そういう場所なのである。

「おっぱいというのは、つまり母性の象徴なわけですよ。だからそれに執拗な執着を見せるってのは、精神的にだいが未熟ってことになりますよね。だから『おっぱい好き』あガキっぽいやつが多いんですよ」と、宇津井が言った。これに素早く反応したのが今まで居眠りしかけていた田岡だった。田岡はびくっと首を持ち上げて、宇津井のほうを睨みつけた。それもそうだろう、田岡は大のおっぱい好きだ。哲学と間違えてこのゼミに入ったことを誰よりも後悔していた人物である。「おれさあ、もう、おっぱいさえデカかったら別に穴あいてなくてもいいや」と言って牛のような彼女（ニューハーフ）といつもべたべたしている彼は常にお尻の話で盛り上がるこのゼミで殆ど喋らずに、いつもうつむいて居眠りをしていた。

「でも、あれだよ。ケツに執着するのだから子供じみてますよね。あれ、誰だっけか？フロイト？あの人の『性発達性理論』では肛門期は最初から二番目だよ？幼稚園児だよ？どっちがあガキっぽいんだよ！」と、田岡は話しているうちにどんどんテンションが上がってきて、最後には軽く怒鳴っていた。よほど「未成熟」扱いされたのが頭にきたのだろう。ただ、そんなことは微塵も気にしない、といった様子で宇津井は冷ややかにそれに反論した。

「ははっそれはまったく違う話でしょ。そもそも田岡君は『性発達性理論』の意味をわかってないでしょ。「肛門」でだけで持ってきたでしょ。ね。それに、おしりと肛門はぜんぜん違うし。」

「五月蠅えよ！『性発達性理論』がなんだよ！そんな細かいこと言ってるから「ケツ好き」はガキっぽいんだと。だからあんな肉団子みたいな女としか付き合えないんだよ！」と、田岡は明らかに理論を欠いた、それこそ「ガキっぽい」反論をした。中村先生は嬉しそうにニヤニヤしながら二人の様子を眺めている。

はあ、と僕はため息をついた。他の生徒たちも、もう二人のやりとりに飽き始めていた。もう、どっちだって、いいよ。どっちも同じくらい子供じみている。「肉団子」とか、わかるけど、ひどいし、フロイトさんに色々失礼だぜ。はあ、もう、早く終わんねえかな。

研究室の窓を覗くと、表では知性の大幅に欠けたような学生たちがやたら楽しそうに野球に勤しんでいた。楽しそうだ。僕はどちらかというスポーツは嫌いだが、それでもここに居るよりかは向こうのほうが百倍マシなような気がする。

「ねえ」

はあ

「ねえ」

ん？

あ、気づいたら中村先生が僕に意見を求めていた。

「ねえ、君はそこんどこどう考えているわけ？」

ああ、考えね。僕としてはですね。このクソのように腐りきっている（例えばこのゼミのような）大学教育の実態がこうやって少しでも皆さんに伝わればいいと、そう考えていますがね。僕としては。

などという事をいう筈もなく、僕はただ「あ、「おしり好き」のほうが子供っぽいと思います」とだけ言った。田岡にはこないだの飲み代を三千元ほど借りている。

そして、僕が「もう学校辞めようかな」などと考えていると、カキンッと気持ちいい音がして窓ガラスが割れ、真っ白なボールが田岡の頭に直撃した。田岡は血を流して呻きながら倒れている。中村先生と宇津井は頭を真っ白くしながらわたわたとしていた。僕はこれを、極めて閉塞的で排他的な空間である学校という鬱屈した共同体に対する真っ白な無垢なる魂からの崇高なるテロリズムだと考えるのだが、皆さんはどうだろうか？

中指の先が割れている。二又の線が走り、裂けた皮膚から赤い肉が覗いている。キーボードを叩く度、痛みに似た痒みが指先に触る。その痛みは指先にぼんやりと留まって、僕のを速度を緩めている。

だから、ぼくはまだ昼飯に行けない。

大沢さんと意思だの後姿を見送りながら、指先を見つめている。親指を撫でると、乾いてかたくなっている傷口が皮を搔く。ぎゅっと押しえつけると、傷口の内側が脈打つのをを感じる。親指の皮膚に震動が伝わっている。僕の意味とは無関係に蠢くそれは、なにか別の生き物であるように思える。

なにか、別の生き物が僕の中で蠢いている。

傷はヨーヨーで出来た。

今朝、遊んでいた。女が置いていった。女の衣服や食器などは跡形もなくなっていたのに、ヨーヨーだけが残っていた。女が集めていた、ジュースのおまけで付いてくるヨーヨーだった。なぜそんなものを集めるのか、と尋ねると、だって、なんか、かわいいじゃない、とだけ言う。それがテーブルの上に置かれている。

朝、シャワーを終えた僕は下着だけを身に着けて、それを眺めている。朝の光が閉めたカーテンから漏れ出して、部屋を薄く白く覆っている。ヨーヨーは七つある。赤と青と紫と白がある。僕は赤いものに手を伸ばし、紐を右の中指に縛りつける。きつく、更に縛ると押しえつけられていた中指の血管が身を振らせているのがわかる。右手に包んだ赤いヨーヨーは、まだシャワーの熱を留めている皮膚には冷たい。

板張りの床に向かって、投げつける。

赤いヨーヨーは真っ直ぐ落ちてきて、止まる。

空転している。きりきりと、空転する音が朝の空気を神経質に震わせる。それがなにかの泣き声に聞こえないこともない、と僕は思う。濡れた髪の前から雫が一つ落ちて、板張りの隙間に消える。

僕は中指を持ち上げる。

空転していたヨーヨーが、音を立てて戻ってくる。

赤いプラスチックが僕の濡れた肉を打つ。その音が部屋に響き、衝撃が骨に届く。それが痛いのかどうか、まだ僕は判っていない。

繰り返す。再び、肉を打つ。少し痛いと思う。

何度も繰り返す。肉を打たれるのは久しぶりなのだと思う。いつの間にか僕はその感覚を求めている。衝撃の残る骨が飢えている。

もっと、もっと、肉を打て。

その感触に僕は飢えている。僕は赤いヨーヨーを女だと思う。僕の手をひらを叩くのは女だと思う。

女が叩くその感触に飢え、僕の指先は割れる。痛みは鈍く、微かだ。ヨーヨーを外し、指先を見

ると血が滲んでいる。血はヨーヨーの赤よりも沈んだ色をしている。僕は汗を全身にかいている。得体の知れない熱が身体の奥に沈んでいる。睾丸がいつもより重い感じがする。指先を舐めると、tの味がして鋭い痛みが走る。僕はそれを確認するように、もう一度舌を這わせる。

キーボードを中指でなぞる。

叩く度、痛みに似た痒みが指先に触る。その痒みは速度を緩めはしているが、僕はそれを忌みはしない。未だ骨に残る感触をこっそりと撫でながら、僕はキーボードを叩き、そして赤ら顔で戻ってくる大沢さんと石田に笑顔で応じている。

夜の闇に怯えぬ為に

水を飲む。

飲み干す。

ごくりと咽喉が鳴り、その音が雨音の中に掻き消える。薄い屋根に雨が撃ちつけているその音は、ぴた、ぴた、と部屋を支配しているかのようだ。咽喉の音は果たして寝息を立てる彼女の耳に届いたのだろうか。と思う。毛布を巻きつけただけの彼女は街頭の光になぞられながら、窓の下に寝転がっている。寝ている布団はすっかり固くなっている筈だ。ここしばらく、干すひまもなく雨の日が続いているから。空が、晴れるという行為を忘れてしまったように。降り続けた雨は土や壁に染み込み続け、僕たちはすっかり水っぽく溶け易くなってしまった。

僕は彼女の傍らの椅子に腰掛けています。

彼女を覆う街の光は雨粒を映し込み、揺れ動いている。赤かった光は青くなり、窓の外では思い出したように車が走り出している。入り込んでくる車の音はこの部屋を頂点にして曲線を描いているのだ、と僕は思う。その曲線は幾つも重なり、窓に光の線が流れる。光は黄色く、赤く、彼女を撫で回しているように見える。薄っすらと濡れた目元に反射するその光は、しかし、僕のところには届かない。僕は空のコップをテーブルに置く。かたん、と音がして、掻き消える。ぴた、ぴた、と雨が鳴る。

さっき夢を見た。内容は覚えていないが、怖かった。だから、起きた。

雨は降り続けている。光は彼女に纏わり続けている。彼女は眠り続けている。その寝息はこの部屋における唯一の生命であるように聞こえる。僕はただそれだけを眺めている。窓から差す光は部屋の中にくっきりとした闇を作り出していて、それを眺め続けているうちに僕はこの身を手放してしまった気持ちになる。肉体を手放した僕は、彼女に触れることさえか叶わない。その空白がこの身を、そして感覚をじりじりと削り食っている。

また、水を飲む。

飲み干す。

なんとなく、まだ夢が纏わりついている気がする。たぶん、誰かが死んでしまったのだろう。その上に広がっていた、青い空だけは覚えている。雲ひとつ浮かずに、白い太陽の光が目を刺していた。真っ白い視界の中に風が吹くのが見えて、もう動かない誰かの服の裾がひらひらと揺れた。同じようにひらひらと影も揺れて、その揺れが今も僕の中にこびりついている。彼女の寝息だけが、この部屋の中で暖かい。

意識が時計の音を捕らえる。かち、かち、と等しい感覚で鳴るその音のほうに目を遣ると、盤面の蛍光色がおぼろげに浮いている。秒針が怯えたようにだけ、びくびくと回っている。おびえるなおびえるな。まだ夜は始まったばかりなのだ。明けるまでの長い長い時間が目の前に悠然と横たわっているのが僕にはわかる。僕も横たわり、眠ればいいのかももしれない。でも、眠りたくない。眠り方をすっかり忘れてしまったようだ。横たわる時間を前にして、どうしたらいいかわからない。

しかし僕は途方に暮れることすらせずに、彼女を、そして闇を眺め続けていた。眺め続けながら

、こうして一人、頭の中で言葉を紡いでいる。僕の言葉は彼女には届かない。そうして闇に消えてゆく言葉は、闇に溶け入らぬ唯一の自身でもある。止まぬ雨の中で、僕はすっかり言葉になっている。

ぴた、ぴた。

降り続ける雨は世界を水浸しにして、やがて世界は水で溢れ返ってしまうだろう。そうなったら布団は干せないままだ。どうせ寝るのならふかふかの布団がいいのに、と眠らない僕は思う。かつてそうであった筈の布団を思い、僕は目を閉じる。眼球の奥で僕の身体はふかふかの布団に包み込まれる。

と、それまで重なり続けていた車の音が止んだ。それまで部屋の中にあった何かが欠けた。ぴた、ぴた、と雨音は続きながらも、死に絶えたような静けさが現れる。僕は布団の中で一瞬、何も聞こえなくなってしまったのだと思う。しかし彼女の寝息はその中でもひっそりと響き続けている。

彼女は眠り続けている。

僕は目の奥の布団の中で身体が冷え込むのを感じる。静かに身を震わせる。その震動もまた、誰に伝わることなく掻き消えてしまえばいい、と思う。